

令和7年度
和歌山市社会教育委員

第3回定例会議議案書

日 時 令和8年2月10日（火）
午後2時30分～午後4時（予定）

会 場 勤労者総合センター 6階 文化ホール

教育学習部 生涯学習課

第3回定例会議次第

1 開会

2 議題

「社会教育活動に対する壮年層へのアプローチの仕方について」

① 「はぐみ YELL 砂山」の活動報告

② 2年間の活動について振り返り

③ 提言内容の検討

3 その他

(1) 令和8年度・9年度における検討テーマ設定について

4 閉会

議題

社会教育活動に対する壮年層へのアプローチの仕方について

①「はぐみ-YELL 砂山」の活動報告について

概要	<p>地域社会の担い手として期待される「壮年層」（おおむね30代～50代）に対する社会教育活動への参加促進を目的に、令和7年度に砂山地区をモデルケースとして、実践活動を実施する。</p> <p>壮年層との接点を持つことを目指し、まずは、小学生を対象とした地域イベントを開催し、その保護者である壮年層に対しても、地域で活動する社会教育団体の存在をアピールする。</p> <p>また、壮年層は家庭・仕事等で多忙な時期にあたり、地域活動への関与が限定的であることから、自然な形で地域との接点を持ってもらうことを狙いとし、子供をきっかけに保護者も巻き込み、地域活動への関心と理解を促し、将来的な参画へとつなげていく段階的なアプローチを進める。</p>																																										
実施主体	はぐみ-YELL 砂山																																										
参加者 (敬称略)	<p>プロジェクトメンバー（11団体）</p> <table border="1" data-bbox="244 904 1532 1200"> <tr> <td>連合自治会</td> <td>公民館</td> <td>社会福祉協議会</td> </tr> <tr> <td>消防分団</td> <td>地域活動連絡協議会</td> <td>婦人会</td> </tr> <tr> <td>地域安全推進委員会</td> <td>民生児童委員会</td> <td>連合老人クラブ</td> </tr> <tr> <td>むつみ保育園父母の会</td> <td>摂南大学現代社会学部 F A L 和歌山市チーム</td> <td></td> </tr> <tr> <td colspan="3">オブザーバー</td> </tr> <tr> <td>和歌山市社会教育委員</td> <td>和歌山市社会福祉協議会</td> <td>和歌山市生涯学習課</td> </tr> </table>			連合自治会	公民館	社会福祉協議会	消防分団	地域活動連絡協議会	婦人会	地域安全推進委員会	民生児童委員会	連合老人クラブ	むつみ保育園父母の会	摂南大学現代社会学部 F A L 和歌山市チーム		オブザーバー			和歌山市社会教育委員	和歌山市社会福祉協議会	和歌山市生涯学習課																						
連合自治会	公民館	社会福祉協議会																																									
消防分団	地域活動連絡協議会	婦人会																																									
地域安全推進委員会	民生児童委員会	連合老人クラブ																																									
むつみ保育園父母の会	摂南大学現代社会学部 F A L 和歌山市チーム																																										
オブザーバー																																											
和歌山市社会教育委員	和歌山市社会福祉協議会	和歌山市生涯学習課																																									
実施状況	<p>1、実行委員会の開催状況</p> <table border="1" data-bbox="244 1252 1532 1727"> <thead> <tr> <th>回数</th> <th>開催日</th> <th>主な議題</th> <th>参加メンバー</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>第1回</td> <td>令和7年4月16日</td> <td>プロジェクト趣旨・背景説明、メンバー紹介</td> <td>12名</td> </tr> <tr> <td>第2回</td> <td>令和7年5月22日</td> <td>プロジェクト名称決め、イベント内容検討</td> <td>15名</td> </tr> <tr> <td>第3回</td> <td>令和7年6月18日</td> <td>イベント内容決定、開催日決定</td> <td>10名</td> </tr> <tr> <td>第4回</td> <td>令和7年8月13日</td> <td>事前認識合わせ</td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td>令和7年8月18日</td> <td>はぐみ-YELL 砂山 サバイバルミーティング開催</td> <td></td> </tr> <tr> <td>第5回</td> <td>令和7年9月10日</td> <td>イベント振り返り、今後の取り組みについて検討</td> <td>8名</td> </tr> <tr> <td>第6回</td> <td>令和7年10月16日</td> <td>イベント企画検討・次回イベント内容決定</td> <td>8名</td> </tr> <tr> <td>第7回</td> <td>令和7年11月5日</td> <td>イベント詳細決定</td> <td>8名</td> </tr> <tr> <td></td> <td>令和7年12月21日</td> <td>はぐみ-YELL 砂山 卓球 EXPO 開催</td> <td></td> </tr> </tbody> </table> <p>2、取り組みの内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ■場所 和歌山市立砂山小学校 ■開催内容 卓球 EXPO <ul style="list-style-type: none"> 第1部 13:30～14:00 卓球講座 第2部 14:00～15:00 卓球大会 第3部 15:00～15:30 フリータイム ■広報活動 小学校・コミュニティセンター、回覧板等でリーフレットを配布。 			回数	開催日	主な議題	参加メンバー	第1回	令和7年4月16日	プロジェクト趣旨・背景説明、メンバー紹介	12名	第2回	令和7年5月22日	プロジェクト名称決め、イベント内容検討	15名	第3回	令和7年6月18日	イベント内容決定、開催日決定	10名	第4回	令和7年8月13日	事前認識合わせ			令和7年8月18日	はぐみ-YELL 砂山 サバイバルミーティング開催		第5回	令和7年9月10日	イベント振り返り、今後の取り組みについて検討	8名	第6回	令和7年10月16日	イベント企画検討・次回イベント内容決定	8名	第7回	令和7年11月5日	イベント詳細決定	8名		令和7年12月21日	はぐみ-YELL 砂山 卓球 EXPO 開催	
回数	開催日	主な議題	参加メンバー																																								
第1回	令和7年4月16日	プロジェクト趣旨・背景説明、メンバー紹介	12名																																								
第2回	令和7年5月22日	プロジェクト名称決め、イベント内容検討	15名																																								
第3回	令和7年6月18日	イベント内容決定、開催日決定	10名																																								
第4回	令和7年8月13日	事前認識合わせ																																									
	令和7年8月18日	はぐみ-YELL 砂山 サバイバルミーティング開催																																									
第5回	令和7年9月10日	イベント振り返り、今後の取り組みについて検討	8名																																								
第6回	令和7年10月16日	イベント企画検討・次回イベント内容決定	8名																																								
第7回	令和7年11月5日	イベント詳細決定	8名																																								
	令和7年12月21日	はぐみ-YELL 砂山 卓球 EXPO 開催																																									

3. 当日の様子

<受付開始前>
地域の方々も準備の手伝い



<実践練習>
経験者が初心者に競技説明



<試合開始>
知らない人同士でペアを組んで試合



<中級決勝戦>
点の取り合いになる白熱した試合



今後の予定

12月のイベントでは、参加者34名、運営スタッフ21名（西和中学校7名、当日ボランティア4名、はぐみ-YELL 砂山関係者10名）と多くの方々に参加していただき、イベントは盛況でした。今後は、壮年層との交流を「子供が企画」する場合と、壮年層の活躍の場を「地域住民が企画」する場合など、世代間交流を通じて、地域の居場所づくりに取り組んでいく予定です。運営に関わる人材に限らず、当日のみの参加や関心のある分野への関与など多様な関わり方を認めたり、地域の中にある隠れた人材を発見したりしながら、日々の小さな取り組みを続けることで、地域で活動する団体の取り組みや魅力を知ってもらう機会となればと考えています。はぐみ-YELLの魅力を知ってもらうことで、最終的には地域コミュニティへの主体的な関わりにつなげていくことを目指します。

参考

<当日のチラシ>



砂山地区実践活動報告

会議	砂山地区プロジェクト第5回打ち合わせ（振り返り会）		
日時	令和7年9月10日 13:30～15:00	場所	西コミュニティセンター 会議室
参加者 (敬称略)	プロジェクトメンバー		
	社会福祉協議会 榎原 雅忠	地域活動連絡協議会 山本 美保 (和歌山市社会教育委員)	婦人会 宮井 句子
	むつみこども園父母の会 名河内 佑也	摂南大学現代社会学部 F A L 和歌山市チーム 大橋 美優	
	オブザーバー		
	和歌山市社会教育委員 上野山 裕士	和歌山市生涯学習課 前田 直彦	和歌山市生涯学習課 吉田 晃平
議事	<p>1. 開会 プロジェクトリーダー 山本美保氏よりあいさつ。</p> <p>2. 和歌山市社会教育委員第2回定例会議の報告について 生涯学習課から、和歌山市社会教育委員会第2回定例会議での報告資料について説明。</p> <p>【社会教育委員からの提言内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者にアンケートを取ることで、取り組み内容の改善もでき、参加したい保護者も増える。 ・子供のイベントと並行して、保護者のイベントを行うと壮年層へのアプローチがうまくいくのではないか。 ・教師が参加すれば、生徒の参加も増えるのではないか。学校が始まっていれば、先生も参加しやすい。 <p>3. サバイバルミーティングの振り返り</p> <p>【改善点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・休み明けで参加が難しかったのか、参加者が少なかった。 ・救護の体制を取っておく必要あり。 ・チラシに対象者や保護者の同伴が必要かなどを記載する。 ・チラシは学生任せにしない。 ・イベント終了後の活動報告を実施した方が、学校側も喜び、知名度にもつながる。 ・「はぐみ YELL-砂山」をもっと知ってもらうために、活動通信があっても良いと思う。 <p>【良かった点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・イベントの企画としては、楽しく学ぶことができ非常に良かった。 ・西和中の生徒も参加ができて良かった。各学校のリーダーにも声掛けしイベントに来てほしい。 ・接することの少ない大学生と一緒に学ぶことができ、防災について考える良い機会となった。 <p>4. 次回以降の取り組みについて</p> <p>① 方向性 <u>子供のイベントをきっかけに、壮年層同士が触れ合える場を創出する。学校の先生の協力も得る。</u> <u>日常の風景として、大人とのふれあい、面白いことが安心して行えるコミュニティとしたい。</u></p> <p>② 場作りの頻度 <u>3か月に1回程度（年4回）のイベント実施を予定。ミーティングは毎月実施。</u> 継続的な資金の確保が課題。自治会の協力が必須。壮年層の加入率が増えれば、お互いにメリットがある。 <u>予算立ての為に、会としての「年間事業計画」「予算書」「規約」が必要。</u></p> <p>③ 今後のテーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・テーマ毎にプロジェクトリーダーを決めて、進めていけば負担感は少ない。 ・ポケモンカード（子供が大人に教える）・将棋（大人が子供に教える）、書道教室の2案が候補。 ・コミセンや他イベントのコラボもあり。 <p><u>次回打ち合わせの際に、各自テーマを持ち寄る。</u></p>		
次回開催日	10月16日（木）13:30 西コミュニティセンター 小ホール		

砂山地区実践活動報告

会議	砂山地区プロジェクト第6回打ち合わせ		
日時	令和7年10月16日 13:30~15:15	場所	西コミュニティセンター 小ホール
参加者 (敬称略)	プロジェクトメンバー		
	社会福祉協議会 榎原 雅忠	地域活動連絡協議会 山本 美保 (和歌山市社会教育委員)	民生児童委員会 藤田 久仁子
	むつみこども園父母の会 名河内 佑也	摂南大学現代社会学部 F A L和歌山市チーム 大橋 美優	
	オブザーバー		
	和歌山市社会教育委員 上野山 裕士	和歌山市生涯学習課 前田 直彦	和歌山市生涯学習課 吉田 晃平
	和歌山市社会福祉協議会 左巴 誠人		
議事	<p>1. 開会</p> <p>プロジェクトリーダー 山本美保氏よりあいさつ。</p> <p>2. イベント企画について検討</p> <p>■摂南大学 FAL チーム大橋氏から、「はぐみ-YELL 砂山」企画案について説明。 ※詳細は別添資料①参照</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大人が楽しめるイベントを子供が企画し、周りの大人や中高生はそれをサポートする。(子供企画) ・親子で参加できるイベントを地域の大人が企画し、イベントの講師も地域住民が務める。(大人企画) ・次回12月のイベントは、大人企画を想定。 <p>⇒子供企画は、学校の協力が重要。(協力してくれる子供・企画する時間などの確保のため)</p> <p>※今福小学校は、初回は地域の大人が企画し、その活動の中で校長先生から子供主体の企画がしたいと提案を受け、授業の一環(探求学習)で実施するようになった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子供主体でイベントを実施する中で、協力者(学校の先生や保護者:地域の壮年層)を見つけていく。 <p>3. 「はぐみ-YELL 砂山」の運営について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・組織にこだわり過ぎず、コアメンバーで話を深め、適宜助力を得たいメンバーに声かけを行う。 活動の内容は、プロジェクトメンバー全員に知ってほしいので、周知は必須。(はぐみ-YELL 通信等) ・幼稚園から高校まで揃っていることは砂山地区の強み。学校への情報発信(報告と周知)も大事。 <p>■生涯学習課から、規約・事業計画について説明 ※詳細は別添資料②参照</p> <p>⇒草案として提示。これを基に、意見を求めながら内容の見直しを進める予定。(年内目途で完成)</p> <p>事業計画は、大橋氏作成の企画案に変更予定。</p> <p>4. テーマ選定について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「子供企画: 壮年層との交流を子供が企画する」「大人企画: 壮年層の活躍の場を作る」は本会の趣旨と合致している。この2種の企画で進める方針。 ・大人が「砂山地区にいるすごい人」を知るのも面白い。(人発見) ・砂山地区内でも今後、様々なスキルを持った人の発掘を行っていく。 ・砂山地区の特徴として、卓球が盛んであり、国体出場選手もいる。 ⇒卓球は、子供も大人も好き。砂山卓球大会など世代を超えた交流が可能。 ※モルックも話題になったことから、今後の候補としていく。 ・卓球が面白い、もっと行いたいとなれば、砂山の卓球クラブが紹介できるので、コミュニティも広がる。 ・県和商、西和中学校の卓球部に審判を依頼する(学校を巻き込む)なども可能ではないか。 ・卓球の場所、卓球台は、小学校から借りる。小学校体育館の利用日を確認する。(山本氏: 12/21 利用可) ・卓球の講師、卓球の道具は、藤田氏が確認する。(卓球の先生: 山下氏の予定も確認済)。 ・イベントの企画及びチラシ作成は、大橋氏が実施する。 ・「はぐみ-YELL 砂山」の卓球大会の実施日は、<u>12月21日(日)砂山小学校体育館で決定。</u> 		
次回開催日	11月5日(水) 9:30~ 西コミュニティセンター 小ホール ※当日の流れや募集の仕方など、詳細について打ち合わせを行う。		

砂山地区実践活動報告

会議	砂山地区プロジェクト第7回打ち合わせ		
日時	令和7年11月5日 9:45～11:15	場所	西コミュニティセンター 小ホール
参加者 (敬称略)	プロジェクトメンバー		
	社会福祉協議会 榎原 雅忠	地域活動連絡協議会 山本 美保 (和歌山市社会教育委員)	婦人会 宮井 句子
	民生児童委員会 藤田 久仁子	むつみこども園父母の会 名河内 佑也	摂南大学現代社会学部 F A L 和歌山市チーム 大橋 美優
	オブザーバー		
	和歌山市生涯学習課 前田 直彦	和歌山市生涯学習課 吉田 晃平	
議事	<p>1. 開会 プロジェクトリーダー 山本美保氏よりあいさつ。</p> <p>2. イベント企画案の共有</p> <p>■摂南大学 FAL チーム大橋氏から、「はぐみ-YELL 砂山」企画案について説明 ※詳細は別添資料①参照 ⇒(i)未経験者、(ii)経験者(気軽に競技の部)を同時に実施後、(iii)経験者(本気で勝負の部)を実施する。 試合は1ゲームマッチ(11ポイント制)だが、(iii)の決勝戦のみ、3ゲームマッチとし、参加者はみな観戦、応援する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・審判は、西和中、県和商の卓球部を想定。山本氏より中高生が来れるか学校へ確認する。(チラシ完成後) ・人数次第では、敗者復活やリーグ戦形式を検討する。(事前申し込み必須) ・募集人数は50人程度。対象は、小学生から大人までで、ダブルスで試合を行う。卓球台6台(内小学校4台)。 ・保険は社会福祉協議会で対応。 ・表彰状を用意して、表彰式も実施する。 ・モルックを用意して、待機時間を有効活用する。 ・救急セットは、小学校もしくは連絡所から借用。 <p>■募集について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自治会の回覧板と一緒に回すので、11月20日頃までに支所連絡所へ提出する。募集の締め切りは、12月15日(月)とし、大橋氏が11月10日前後にチラシ作成予定。コミセンにもチラシを設置する。 ・申込者は、QRコードで回答、もしくは砂山連絡所に行って申し込みを行う。 ・申込時に、どの部に参加するのか確認。上履き持参と記載しておく。 ・車で来る場合の駐車場(砂山小学校運動場、もしくは小学校西側空き地)、正門前の通行止めを説明する。 <p>■スケジュール、役割(当日)</p> <p>【午前】 ・卓球台2台を搬入。(天候次第でタイミングは、榎原さん判断)</p> <p>【午後】 ・12時集合、受付を13時から開始し、イベント自体は13時30分開始。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・元国体選手の山下氏によるミニ卓球教室。 ・(i)未経験者、(ii)経験者(気軽に競技の部)を開始。 ・(iii)経験者の部(本気で勝負)を開始。 ・(iii)経験者の部の決勝戦。表彰式 <p>【役割】 受付：上野山氏、大橋氏 撮影：生涯学習課 交通整理：3名程度(要確認) 講師サポート：藤田氏</p> <p>■当日までの準備物</p> <p>【榎原氏】モルック、卓球台搬入、保険加入、筆記用具準備、交通整理係確保、小学校鍵借用</p> <p>【山本氏】中高生の卓球部対応、駐車場の使用確認、救急用具の借用</p> <p>【藤田氏】卓球ラケット、球の準備</p> <p>【大橋氏】チラシ作成、申込フォーム、組み合わせ表、受付簿、賞状(※)、アンケート作成 ※優勝だけなので、A4で6枚。チラシ作成時のイベント名を入れる。 開催者は、「はぐみYELL-砂山 実行委員会」</p> <p>【生涯学習】表彰の音楽を準備</p> <p>■アンケート用紙の内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・感想・今後もイベント情報を提供してほしいか(メールへの情報配信許可)・実施してほしいこと・ 		
次回開催日	適宜、LINEで情報共有し、必要があれば打ち合わせを実施する。		

② 2年間の活動について振り返り

1. はじめに

本提言のテーマ「社会教育活動に対する壮年層へのアプローチの仕方について」は、本会議において委員の協議のもとに設定したものであり。社会教育委員の会議では、このテーマについて約2年にわたり、継続的に議論を重ねることとなった。

現在の和歌山市の社会教育において、壮年層へのアプローチが重要な課題になる背景として、第一に、地域の繋がり希薄化があり、社会の多様化に伴い、自治会に加入しない人や地域との交流を持たない人が増加し、地域コミュニティの基盤が弱まりつつあること。また、第二として、社会教育団体における会員の高齢化の進行があり、市内42地区に分けて活動していた社会教育団体においても、会員の高齢化により活動規模の縮小や団体数の減少が進んでおり、今後、地域の社会教育活動を持続することが困難な状況になると想定されることが挙げられる。

こうした状況を背景として、地域における社会教育の担い手不足という課題が生じており、地域において社会教育の今後を担う壮年層の人材が不足し、このことが若い子育て世代をはじめとする多様な人々が社会教育に参加したり、相互に支え合いながら活動を行ったりすることを困難にしていると考えられる。

地域における社会教育の人材不足は、地域におけるつながりや助け合いを弱め、結果として地域において孤立する人々を生み出したり地域の衰退を招いたりする恐れがある。

2. テーマ選定の理由

各社会教育団体においては、会員の高齢化が進む状況の中、それぞれの団体の活動の維持が難しくなっている現状がある。また、現代の高齢化社会の中で、地域の活動を積極的に実施し、地域の社会教育活動を持続可能なものとするためには、壮年層に参画してもらうことが必須となる。そのため、壮年層のアプローチの仕方について2年かけて議論することとなった。

3. 現状について

社会教育関係団体には、地域づくりにつながる地域課題解決に関わることが期待されている。しかし、近年では、会員数の減少や高齢化が進んでいる団体が多くあり、地区での活動を維持していくことが困難なものとなり、解散する団体も見受けられるような状態である。

これらを解決するためには、新たな活動の担い手の確保、特に壮年層を呼び込むこ

とが重要になってくるが、価値観の多様化により、壮年層は社会教育活動に参画する機会が減っている。ところが、「社会意識に関する世論調査（令和4年12月調査）」によると壮年層のうち、60%以上の方が社会に貢献したいと思っていると回答している。つまり社会貢献意識を持っている人は少なくないが、実際に活動に至るまでの過程で何らかの要因により、活動に行きつくことが出来ていない現状にある。

4. 課題について

活動への参画に至らない理由としては、次のような想いがあるからと考えられる。

- (1) 一人で活動に参加するのは不安である。
- (2) 仕事や子育てと両立できるか不安である。
- (3) 緩くなら関わりたいが、濃く関わることは負担になる。
- (4) 活動の情報が上手く伝わってこない。
- (5) 何から始めて良いかわからない。

5. 壮年層へのアプローチの方法について調査

現在、市内にて行われている壮年層を巻き込んだ活動について、調査を実施した。今回のテーマは、地域の社会教育活動を、いかにして持続可能なものにして、壮年層にも参加しやすい環境を整えるかが、ポイントである。そのため、以下の先行事例は、壮年層にも参画しやすく、モデルケースに取り入れるべき仕組みを構築していると考えられる。

【今福地区】

和歌山市内の今福地区では、かつては地区の憩いの場であった銭湯が、生活様式の変化に伴い利用客は減少している。しかし、令和3年度の六十谷水管橋破損により、断水が発生した際に、入浴に困った人々を支えたのは、地域の銭湯だった。断水は、地域住民が地域の社会資源の大切さを再認識する機会となった。

このことが契機となり、新たな地域活動を創出する仕組みとして地域住民が主体となって「今福おこし」を発足させ、地区社協、自治会、民生委員、PTA役員、小学校長、近隣社会福祉施設などの地域主体、理学療法士などの専門職、県外大学の教員や学生などがそれぞれの立場から今福地区を盛り上げるためのアイデアを持ち寄り、活発な意見交換を行っている。

そして、小学校や銭湯を活用した地域交流イベントを複数回実施しており、今後も銭湯のプラットフォームとしての機能を高め、多様な地域主体の出会いを誘発し、地域活動を創出することが期待されている。

【高松地区】

高松地区では、令和6年度に夏休み期間の子供に居場所を提供することに加え、地域の方や当日ボランティアスタッフとして参加する地元の高校生など、地域内にみんなの居場所をつくることを目的としたイベントを3日間に渡り開催し、居場所づくりを通じて地域住民と子供、その保護者との交流を深め、また、自治会の認知度向上にもつなげることを期待していた。

結果として、参加した子供及び保護者から総じて高い評価が寄せられており、複数日にわたり継続して参加した子供が見られた点からも、夏休み期間における子供の居場所として、一定以上の役割を果たした事業であったと考えられる。

イベントには、地域の多様な主体が関わっており、地域住民は昔遊びを通じた指導や子供との交流を担い、大学生は企画・運営に参画し、高校生は当日のボランティアスタッフとして活動するなど、世代ごとに得意分野を生かした参画が実現していた。このことから、本イベントは参加する子供だけでなく、関わるすべての人にとっての「居場所」として機能していたといえる。

またイベントでは、地域内の人材が自然な形で役割を持ち、相互に関わり合う場となり、一過性にとどまらない地域活動の可能性を示す取り組みであることから、壮年層にあたる保護者にとっても、自治会をはじめとする地域組織が子供や地域のために主体的に活動していることを実感する機会となり、地域活動への理解や信頼の醸成につながったものと考えられる。

地域の担い手確保および育成の観点から見ると、自治会、老人クラブ、地区社会福祉協議会、保護者など、地域内の多様な団体・個人から「子供たちのためであれば協力したい」との声が寄せられ、人的支援に加え、資金面を含めた協力の意思が示されたことは特筆すべき点である。子供や若者を中心に据えた活動が、地域の担い手確保・育成につながる可能性を持つことが明確に示されたイベントであったといえる。

【広瀬地区】

広瀬地区では、年間を通して、様々な立場の人々が活発に活動され、祭りの開催や岡公園清掃、ダンス等の学級が開設されている。

活動を実施するにあたっては、公民館長を中心として、副館長3人が全体をまとめながら進めており、準備を進めていく段階においては、壮年層の公民館職員が活躍して、PTAとも連携しながら、道具の手配等を行い、活動を支えている。

公民館職員には、21団体ある広瀬地区各種団体代表者のほとんどが所属しており、そのうちの1つである広瀬小学校PTAについても、会長や男性役員等がPTA任期中は職員として活動する仕組みとしている。任期が終わり、PTA役員を退いた後についても、PTA会長を中心に職員として残って活動を続けることが多く、壮年層の社会教育活動への参画につながっている。

各種団体代表者が職員となることで、広瀬地区における公民館以外の団体の活動

も協力できる体制が整っており、毎年開催される広瀬地区公民館の総会開催の際には、会議の最後に公民館以外の団体の年間スケジュールなどの情報共有が行われ、PTA主催の七夕まつり等の行事も地域が一体となって取り組むことができている。

広瀬地区に関わりのある人なら性別・年齢関係なく、誰でも参加することができる広瀬地区壮年会という組織もあり、レクリエーション活動を中心に、ボーリング大会等を実施したり、学習の機会としてAED講習を行ったりと様々な活動を実施している。この壮年会は、団体の目的に沿った活動を行う上で起こる負担感はなく、自由に活動ができることから、夫婦で参加する会員もあり、ゆるく参加できる組織となっていることが特色である。

6. 調査に基づく壮年層へのアプローチを行う上での要点

- (1) 対象地区で活動を行っている地域主体（地区社協、自治会、民生委員、PTA役員、小学校長、近隣社会福祉施設など）が連携している体制があること。
- (2) 活動を継続していくためには、担い手が感じる負担感を軽減することが重要である。そのうえで、過度な責任や負担を伴わず、参加者が無理なく関わられる「ゆるやかで、楽しさを感じられる」活動体制を構築していくこと。

7. 実践活動（実証的なモデル事業）

本活動は、先行する3つの事例から得られた知見を踏まえ構築・実施するものである。実施を通じて一定の成果と課題を明らかにし、今後の社会教育活動への参加を促す、壮年層へアプローチの仕方に関する提言を行ううえでの実証的なモデル事業とする。

8. 実践活動の概要

本活動は、社会教育委員からの提案をもとに対象地区を砂山地区に限定し、地区内の各種団体が参加する実行委員会を設置。実行委員会に加わっている団体は11団体（連合自治会、公民館、社会福祉協議会、消防分団、地域活動連絡協議会、婦人会、地域安全推進委員会、民生児童委員会、連合老人クラブ、むつみ保育園父母の会、摂南大学現代社会学部FAL和歌山市チーム）であり、その他にも地区内の高校や中学校にも協力いただき、適宜参加してもらうことにした。

壮年層へのアプローチを進めるにあたり、子供（小学生）を主な対象とした事業を起点とし、イベントに参加した子供の保護者への働きかけを活動の軸として位置付けた。

9. 実践活動での取り組み

【キックオフミーティング】

令和7年4月16日に、実行委員会のキックオフ会議を実施。本活動の趣旨、活動に至る経緯について共有を行い、各種団体へ協力を依頼した。



○令和6年度・7年度のテーマ

「社会教育活動に対する壮年層へのアプローチの仕方について」

に決定し、令和6年度に他都市事例などを基に議論を進め、令和7年度はモデル的に実践活動を行うこととなった。

その中で、社会教育委員の一人である山本美保委員自らが所属する団体が中心となり、地域内における「社会教育活動に対する壮年層へのアプローチ」に関する実践活動を、令和7年度に実施することとなった。

社会教育委員には、摂南大学で「探求教育」や「フィールド型アクティブラーニング」等に取り組んでいる上野山裕士委員もいることから、学生達にも本活動に参加してもらい、様々なアイデア出し合い、地域の子供達の活動から壮年層にアプローチできるような取組（※将来的には地域で自走）を進めていきたいと考えている。

また、地域内での活動のため、日頃から地域の活性化のために尽力いただいている各種団体の皆様にもお声掛けし、ご協力いただければ幸い。

社会教育委員としては、今回の取組を**実践事例として令和7年度末に取りまとめ**、提言することを予定している。

【実行委員会】

令和7年5月22日、6月18日、8月13日の計3回にわたり打ち合わせを行った。実行委員会の代表・副代表を決定し、活動の名称を「はぐみ-YELL砂山」と決定。イベントの開催頻度や開催時期、イベントの内容について話し合いを進め、第1回目の開催に向けた準備を進めた。

【第1回目の取り組み】

イベント名：はぐみ-YELL砂山 サバイバルミーティング

内容：防災イベントとして実施するが、スポーツの要素も取り入れ、小学生が参加したいと思えるようなイベントを実施。イベントは、座学の前半と体を動かす後半の2部制とした。前半は、和歌山県が製作した「きいちゃん災害避難ゲーム」と和歌山市地域安全課による非常持ち出し品の展示及び説明とし、後半は、段ボールキャタピラーを用いた防災スポーツ競争を行った。

成果：楽しさと学びを両立したイベントとなり、参加者が主体的に学ぶことのできるものとなった。小学生に加え、中学生、その保護者の参加も見られ、幅広い年代が参加し、互いに交流できるイベントとなったことは大きな成果である。今後、各学校のリーダー層への周知や働きかけを行うことで、さらなる参加拡大が期待できる。また、日常的に接する機会の少ない大学生と学ぶ機会を設けたことで、世代を超えた交流が生まれ、小学生や中学生の若い世代にとっても防災について考える貴重な機会となった。

課題：開催時期や広報時における対象者の明確化など、次回開催に向けた改善点が明らかとなった。また、次回以降の参加者増加につなげていくために、イベント終了後に近隣学校へ事業内容や成果を報告する機会を設ける必要があることが分かった。

■当日の様子

<きいちゃん災害避難ゲーム>
小学生、中学生、保護者が一緒に実施



<段ボールキャタピラー>
火災時の避難の姿勢を競技形式で体験



<非常持ち出し品説明>
使い方や必要性について学ぶ



<防災すごろく>
大学生考案の防災すごろくを参加者で取り組む



【実行委員会】

令和7年10月16日、11月5日の計2回にわたり打ち合わせを行った。イベントの企画・運営について検討を行い、壮年層との交流を「子供が企画」する場合と、壮年層の活躍の場を「地域住民が企画」する場合の2種を活動の軸とすることが決定。次のイベント内容について話し合いを進め、第2回目の開催に向けた準備を進めた。

【第2回目の取り組み】

イベント名：卓球EXPO2025 砂山プレイヤー交流戦

内容：砂山地区において卓球が盛んなことに加え、実行委員会の中に、地区の卓球クラブに積極的に参加している方がいたこと、また卓球は誰もが手

軽にできるスポーツであることから、卓球のイベントを企画した。講師には、砂山地区在住の卓球経験者（元国体選手）を招聘するとともに、近隣中学校の卓球部にも参加を依頼した。当日は、講師による卓球講座および中学生卓球部による模範演技を実施した後、参加者を初級・中級に分け、ダブルス形式によるトーナメント戦を行った。

成果：本イベントには、小学生や高校生に加え、家族での参加や日頃活動している卓球クラブの仲間同士での参加も見られ、多くの参加者が集まるイベントとなった。特に、当日編成によるダブルス戦を採用したことで、初対面同士がペアを組む場面も多く見られ、スポーツを通じた自然な世代間交流が生まれた。また、実行委員会のメンバーにとどまらず、地元の卓球経験者やスポーツ団体関係者が当日運営側として参画したことにより、壮年層をはじめとする地域人材の新たな参画を促す機会となり、担い手確保の観点からも大きな成果があった。

■当日の様子

<受付開始前>

地域の方々も準備の手伝い



<実践練習>

経験者が初心者に競技説明



<試合開始>

知らない人同士でペアを組んで試合



<中級決勝戦>

点の取り合いになる白熱した試合



10. モデル事業としての評価と検証

(1) 成果（モデルとして評価できる点）

モデルケースとして実施した2回の取組を通じて、参加した子供の保護者や、家族でイベントに参加する壮年層が会場に足を運び、各種団体の会員と交流を持つ機会を創出することができた。防災やスポーツといった身近なテーマをきっかけとすることで、無理のない自然な交流が生まれ、砂山地区において「はぐみ-YELL砂山」が継続的・定期的に居場所づくりに取り組んでいることを、地域住民に広く周知する機会ともなった。

また、壮年層へのアプローチという観点においては、実行委員会に所属する地区内保育園のPTA関係者が参画したほか、卓球大会においては、実行委員会以外の地域住民やスポーツ団体関係者が当日の運営に協力するなど、新たな担い手の参画が見られ、一定の成果を上げたと評価できる。

さらに、地域住民や学生がそれぞれの立場や強みを生かして参画したことにより、世代を超えた交流が促進され、多世代交流の場としての効果も確認された。

(2) 汎用性（他地域・他事業への応用可能性）

モデル事業では、会場は、地域の社会教育施設（コミセン）や公共施設（小学校）を活用し、講師についても既存の地域人材や市の出前講座を活用して実施したものである。そのため、特別な専門性や大規模な予算を必要とせず、他地域においても応用できる可能性が高い取組であったと評価できる。

(3) 課題（モデル事業だからこそ見えた点）

一方で、事業の継続にあたっては、運営を担う人材の固定化や、特定の担い手に負担が集中する可能性が課題として挙げられる。

本モデル事業においては、こうした課題を見据え、実行委員会の構成段階から複数の団体が参画する体制とした。運営に関わる人材は多いことが望ましいものの、常時運営に関わる者に限らず、当日のみの参加や、関心のある分野への関与など、参加の仕方に幅を持たせる「緩やかな関わり方」を認めることが、結果として運営から離脱する人を減らし、担い手の維持につながると思われる。

また、運営負担の集中については、年間を通じた実施体制を構築することで軽減が図れると考えられる。例えば、運営委員会のみで企画を担うのではなく、地域の小学校と連携し、児童が企画案を考える機会を設ける（学校の協力が不可欠）ことや、実行委員会の構成員がそれぞれの得意分野を生かして役割分担を行うことにより、負担の分散につながる可能性がある。

さらに、安定的な財源確保についても課題であるが、「はぐみ-YELL砂山」に参画する各関係団体の中に自治会が含まれていることから、既存の枠組みを活用した予算配分などにより、一定の財源確保が図れる可能性がある。

(案)

③提言内容の検討

壮年層へのアプローチの仕方について（提言）

近年、社会教育関係団体においては、会員数の減少や高齢化が進行している団体が多く、地区における活動の継続が困難な状況となっており、中には、やむを得ず解散に至る団体も見受けられるなど、社会教育関係団体の維持は喫緊の課題となっている。

これらの課題を解決するためには、新たな活動の担い手を確保することが不可欠であり、とりわけ壮年層の参画を促すことが重要であることは明白であるが、一方で、壮年層が社会教育活動に参画する機会は、減少しているのが現状である。しかしながら、壮年層のうち、社会貢献意識を有する人は決して少なくない。つまり、意欲はあるものの、実際の活動参加には至っていない層が一定数存在すると考えられる。その背景には、「一人で活動することへの抵抗感」や「仕事や子育てによる時間的余裕の不足」、「活動自体への負担感」など、価値観や生活状況の多様化が影響しているものと推察される。

こうした状況を踏まえると、多様な価値観を持つ人々が、それぞれの事情に応じた多様な関わり方で参画できる環境を整えることが重要であり、社会教育関係団体には、そのような柔軟性や受容力が求められていると考えられる。

和歌山市社会教育委員においては、これまで述べてきたとおり、和歌山市の現状及び今後の社会教育関係団体の維持について、危機的な状況になりつつあると認識している。そのため、社会教育関係団体の活動を活性化させるためには、壮年層へのアプローチに取り組むべきだと考える。

なお、和歌山市社会教育委員会定例会議では、壮年層への効果的なアプローチの在り方について、2年にわたり継続的に議論を重ねてきたところであり、これらを踏まえ、次のとおり提言するものである。

提言 1. 多様な関わり方を認める柔軟な運営体制の構築について

実証的なモデル事業においては、実行委員会に関わる人材に限らず、当日のみ参加した壮年層の姿も見受けられた。特に、過去に経験のあるスポーツ（本事業では卓球）については、当日限りの参加であっても、教室に初めて参加した参加者へのサポートなど、十分に役割を担うことが可能であった。

社会教育活動への壮年層の参加を継続的に促すためには、運営を担う人材の固定化や、特定の担い手に負担が集中することを防ぐ仕組みが必要であり、常時運営に関わる人材に限らず、当日のみの参加や、関心のある分野への関与など、多様な参加形態を認める柔軟な運営体制の構築を検討されたい。

提言 2. 地域資源を生かした役割分担と担い手育成の推進について

実証的なモデル事業においては、地域に埋もれている人材を掘り起こし、活動への参画を得ることができた。今回の取組では、卓球の元国体選手に参加してもらい、その高度な技術や経験を参加者に紹介する機会を設けることができた。

実行委員会がすべてを担う体制ではなく、地域の小学校や関係団体、地域住民など、地域資源を積極的に生かしながら役割を分担することが重要である。児童や地域住民が、それぞれの立場や得意分野に応じて関わるができる仕組みを構築することで、無理のない参画を促すとともに、運営負担の分散を図ることができる。さらに、こうした段階的・多様な関わりを通じて、将来的な事業運営を担う人材の育成へとつなげていくことが求められる。

提言 3. 既存の地域ネットワークを活用した持続可能な支援体制の検討

について

実証的なモデル事業においては、時間的制約により、本事業用の予算措置を手当てすることはできなかったが、将来的には、既存の地域団体等からの予算配分も見据え、規約や年間事業計画の作成を行ったことから、今後は、これらを基に、予算の獲得に向けた具体的な検討を進めていく必要がある。

壮年層が社会教育活動を安定的に継続していくためには、人的支援に加え、財源面での支援も重要である。そのため、自治会をはじめとする既存の地域の社会教育関係団体やその他関係団体（これら全て「地域ネットワーク」という。）との連携を行い、柔軟な予算配分や持続可能な支援の体制構築について検討を進めることが望まれる。

その他

(1) 令和8年度・9年度における検討テーマの設定について

和歌山市社会教育委員定例会議の活性化を図るため、令和6年度から委員任期(2年)の期間内において、社会教育関係に係る「検討テーマ」を設定し、議論を進めるとともに、モデル事業を実施してきたところであり、令和8年度以降も引き続き、継続して「検討テーマ」を設定して取り組んでいく予定です。

このような中、この2年間のテーマである「社会教育活動に対する壮年層へのアプローチの仕方について」、中心的な役割を果たしてくれました上野山委員から、大学生等の関わりを増やし、これまでの取組をさらに発展させる形で、来年度以降も検討していったらどうかとの提案がありました。

<上野山社会教育委員からの提案内容>

テーマ	さまざまな地域団体とともに「現役世代の地域参加」について考え、対話し、実践する
キーワード	担い手、居場所、世代間交流、まちづくり
概要	「壮年層の地域活動への参加促進」をめざして 1) さまざまな地域団体と対話する場を作る。 2) 対話した内容を具体化するための方法(イベント、活動など)を協議する。 3) 協議した内容を実施し、振り返りを行う。
活動の目標	<ul style="list-style-type: none">● 地域における対話と実践の場づくり● 「壮年層の地域活動への参加促進」に向けた具体的な活動の実施● 「壮年層の地域活動への参加促進」に対する知見の整理

事務局としても、大学生をはじめ、中学生・高校生など世代を越えた対話や協議、共同活動の機会を設けることにより、これまで社会教育活動への参画が少なかった壮年層にとって、新たな参加のきっかけづくりにつながる可能性があると考えています。

【参考】 前回検討したテーマ一覧

1	テーマ	学校部活動の地域移行について
	概要	教員の働き方改革の観点から、国を中心に進められている学校部活動の地域への移行について、本市における課題や解決方法について議論をする。
2	テーマ	年齢、性別、障がいの有無などにかかわらず、さまざまな人が交流し、学びあう場としての公民館の活用について
	概要	現在42の地区において行っている公民館活動について、より多くの地域住民に参加してもらい、交流する方法について議論する。
3	テーマ	社会教育活動に対する壮年層へのアプローチの仕方について
	概要	各社会教育団体において、会員の高齢化が進むなど、地域の社会教育活動を持続可能なものとするためには、壮年層に参画してもらうことが必須となる。そのアプローチの仕方について議論する。
4	テーマ	人生100年時代における新しい地域づくりを進めるための社会教育について
	概要	これからの人生100年時代において、健康に生きるための「学び」、仕事に関する知識や趣味の活動など自己を高めるための「学び」が必要になると言われている。それらに対応するにはどのような方策が必要か議論する。
5	テーマ	超高齢社会の生涯学習のあり方について
	概要	高齢化率が30%超高齢社会において、定年退職後に旺盛な学習意欲を有している人が新たな学習の機会を通じて自分を高められるようにするためには、どのような仕組みが必要か議論する。